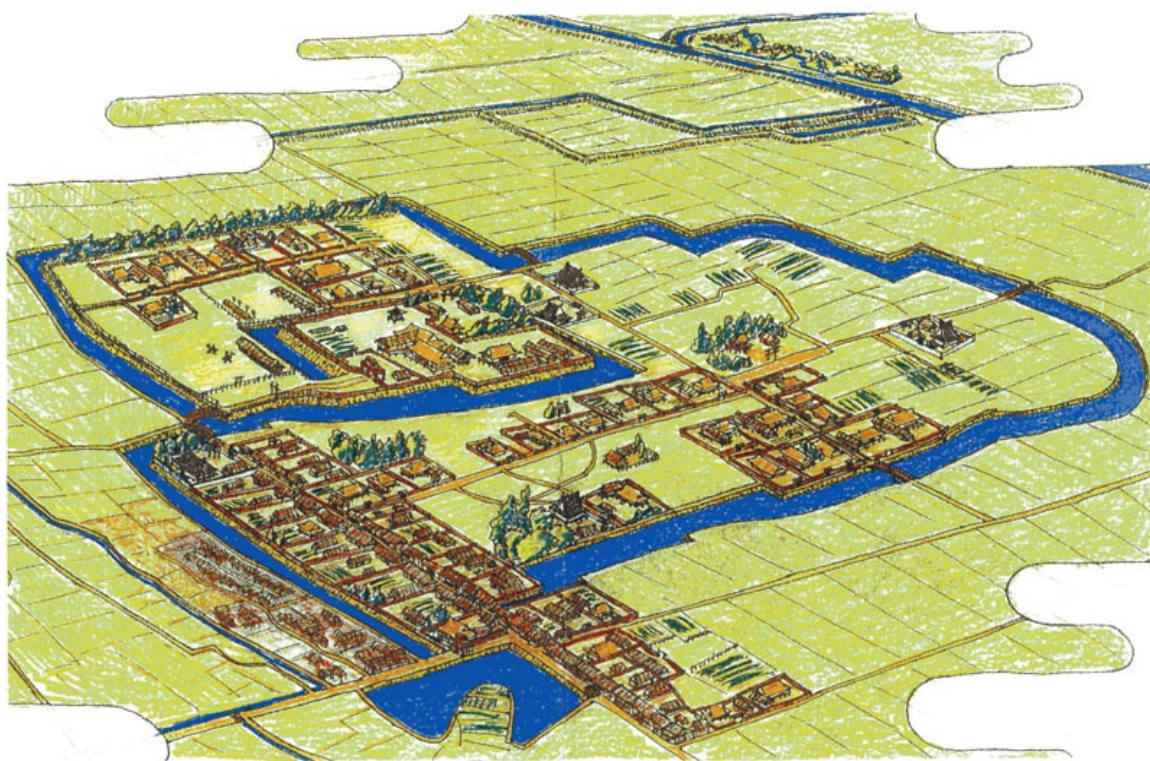


筒井順慶は、有名な言葉を残した武将として知られています。「元の木阿弥」「一味神水」「洞が峠」がそれです。残念ながら、これらの言葉は本来の意味とは異なったマイナスイメージの言葉として使われることもありますが、本来の順慶の言葉の意味と歴史的背景を伝えることは、大和郡山の筒井で歴史を学ぶ「郷土歴史クラブ」人の義務ではないかと思い、拙稿を記す次第です。



筒井城のイメージ

順慶が生まれたのは天文18年(1549)のこと、父は筒井順昭、母は山田道安の娘・大方殿で、誕生の翌年には筒井家の家督を相続しています。順慶2歳、父親の順昭が27歳の若さで死んだからです。

筒井氏が北大和の地侍たちの中で筒井一門の地位を築くのは、順昭の祖々父の筒井順永の時代、その順永が現在の地に筒井城を築くのは永享2年(1430)のことです。

この頃、大和の豪族たちは筒井氏を中心とする筒井党と、南大和で力を持った越智氏の越智党を中心に、連帯と離反を繰り返しながら抗争を繰り返していました。それは応仁の乱で筒井氏は東軍(細川)に、越智氏は西軍(山名)というように、都の貴族や寺社の代理戦争という一面も持っていたのです。

その大和がようやく統一に向かい、筒井氏が大和の盟主の地位を築くのは、順永から百年後の順昭の時代、尾張では織田信長が桶狭間に今川義元を討ち果たし、後に順慶の生涯の敵となる松永久秀が京に上って主君の三好家の家宰(家老職)となり、密かに主に代わる機会を狙っていた頃です。

「元の木阿弥」は、何か一生懸命積み上げていたものが、元に戻ってしまった時に使われたりしますが、あれは違います。

木阿弥さんは盲目の法師で、奈良の角振町に住んでいました。順昭は自分と瓜二つの彼を予てから知っていて、「私が死んだら、あれを替え玉につかえ」と重臣たちに遺言して死んだというんです。

順慶の父の順昭は非凡な武将です。越智党で残った十市氏や古市氏、さらには柳生氏などを攻略し、その晩年には大和の豪族のほとんどが彼の支配下にありました。その彼の死は重臣たちにとって驚愕の出来事だったのでしょう。大和は筒井の元に糾合したといっても、いつ何時反対勢力が立ち上がらないとも限らない。後継ぎの順慶はまだ2歳、せめてあと3年あれば、そこで木阿弥の登場となったのです。

筒井の家臣団の離反を防ぐための措置だったのでしょうが、中心になって事を勧めたのは、順慶の母方の山田道安の一族でしょう。しかし同じ僧形だったとしても、替え玉が3年間も見破られなかったとは考えにくい。最初は隠せてもすぐに真実は伝わったでしょう。



時代は戦国の真っ只中、大和は統一されたというものの、室町將軍家の没落と、それにかわる三好氏の勃興や各地の戦国大名の動静に、大和の武士団の多くは離反よりも、当主が幼くても筒井に与力したほうが生き残る道、と考えたのではないのでしょうか。そして彼らがその道を選んだ時、影武者の木阿弥の存在は、意味がなくなったのです。

三年後に木阿弥は無事に当主の代理の役目を終え、元の角振町に帰って行きました。

だから元の木阿弥です。

筒井城址の発掘調査で、城址の井戸から土皿、土器が幾つも出て来ました。これが「一味神水」です。

筒井の人達は戦いで力を合わせる時、誓いの言葉を書いた紙に連署して最後に牛玉宝印というはんこを押す。それからその紙を焼いて、残った灰を井戸の中に放り込み、この灰の水をすくい上げ、その水を飲むわけです。誓紙の誓いを飲むわけだから、背けない、裏切れない、人々の結束が固くなる。そして最後に土器は井戸の中に捨ててしまうのです。

筒井順慶は幼くして筒井党の盟主になるのですが、順慶を守って盛りたてたのは、先祖代々から筒井氏に味方した重臣たち、福住氏、井戸氏、中坊氏、山田氏、嶋氏、松蔵氏などの大和武士で、彼らは筒井と深い血縁関係で結ばれており、一致協力して年若い順慶を守り立てる。なかには嶋左近や松倉右近といった、日本史の表舞台で活躍した者も居たのです。

それは結束していかないと、自分たちの土地を守れないということですが、順慶の生涯はまさに彼らの支援に応えるために捧げられたといえるでしょう。そして彼らの共通の敵は、狡猾な智謀と戦略で、大和の支配を目論んだ松永弾正久秀だったのです。

松永久秀が信貴山城を築いて大和に入ったのは永禄2年(1559年)、3年後の62年には奈良北辺の多聞山に城を築いて、大和を統一支配する体制を作ります。

この頃はまだ15歳前後の順慶にとって、まさに雌伏の時で、永禄8年(1565年)には筒井城を奪われ、北葛城郡新庄村の布施城に身を寄せることとなります。

しかしこの時順慶に味方したのは、久秀の主筋の三好氏が松永久秀の敵に廻ったことです。三好三人衆と手を結んだ順慶は反撃を開始、翌年には筒井城を奪還、五千の兵を率いて奈良に出陣、多聞城の久秀と対決しました。東大寺大仏殿が炎上するのはこの時ですが、興福寺は順慶に寺内に兵火が及ばないことを懇願、順慶がそれを受け入れ、被害を免れたといわれています。

しかし、68年に織田信長が上洛、またもや形勢が一変します。逸早く信長に謁見した久秀は、人質と茶道具の名器「九十九髪茄子(つくもなす)」を献上して信長の支援を取り付けてしまうのです。筒井城は2万の大軍に攻められ、順慶は城を脱出して、今度は東山中の福住城に逃げ込むこととなります。

その後北大和の諸城を舞台に順慶と久秀は一進一退を繰り返す、元亀2年(1571)、奈良の辰市城の戦いに勝利した順慶は、再び筒井城を取戻します。そしてこの年、順慶に勝利をもたらす風が吹くのです。

それは武田信玄の上洛開始で、信長不利と見た久秀は信玄に通じ、信長を裏切るのです。だが信玄の上洛は実現せず、信長に攻められた久秀は、信貴山城で秘蔵の茶道具と共に爆死、ついに順慶は彼の生涯を掛けた戦いに勝利することが出来たのです。

天正5年(1577)、順慶29歳のときです。

「洞が峠」というのは日和見ということで良い意味ではないが、これが筒井順慶の事跡から出た言葉で、いわば順慶の代名詞のようになっています。

筒井順慶が松永弾正との死闘を勝ち抜いた後、織田信長から大和守護に任ぜられ、名実ともに大和の支配者になるのは1576年、順慶28歳のことです。

ところがその6年後の天正10年(1582)に本能寺の変が起こり、摂津の山崎で明智光秀と羽柴秀吉が天下をかけて激突する。この時、順慶は両方の陣営から誘われるが、山崎を見下ろす「洞が峠」に陣を敷いてどちらが優勢か見ていたというのですね。そこから日和見主義者のことを「洞が峠」というようになり、それはこの順慶の故事から出ているというのですが、これは事実ではないということは歴史に関心のある人なら誰でも知っていることです。

当時、順慶は郡山城に居ました。そこで光秀と秀吉の両陣営から参戦要請を受け、連日軍議を重ねていたといえます。大和を支配する順慶は、両方の陣営にとって、大きな力を持っていたのです。

順慶は光秀には恩義がありました。織田信長に臣従して織田軍の旗下に入ったとき、担当司令官は明智光秀で、大和統一には光秀の力が大きかったようです。大和守護になって筒井城を修復拡張しようとした時、本拠地を現在の郡山城の地に遷すよう勧めたのも光秀だといわれ、築城にあたっては指導を受けていました。平地の真ん中の筒井より、西の京丘陵の先端に位置する郡山の方が城造りには適しているという訳です。光秀は波乱の生い立ちの年若い領主を、自分の境涯に重ねて可愛がったのでしょうか。

重臣たちの意見も二つに分かれました。

有名は嶋左近は光秀に加担するよう勧めたといわれ、他の松倉右近や森好之などの重臣は秀吉を勧めたようです。軍議は何日も続けられ、結局順慶は城を出ることなく、天下分け目の大軍(いくさ)は終わったのです。

順慶は凡庸な武将ではなかったことは確かでしょう。しかしこの時彼がとった行動は、大和武士の本質のような気がするのです。松永弾正との死闘の末に大和を守りぬいた彼の軍団にとって、天下の主は誰でもよかったとするのは偏った見方でしょうか。

彼らは大和の自分の土地を侵略するものに対しては徹底的に抗戦する勇者ですが、大和の外のことはどちらでもよい。彼らにとって、戦いは常に彼らの土地を、大和の国を守ることで、それ以外の戦いは存在しなかったのでしょうか。

筒井順慶が郡山城で病没するのは天正12年(1584)、順慶はこの時まだ36歳で、家督を継いだ定次は凡庸な武将だったようです。

筒井氏が伊賀の国への転封を命じられるのは、大和大納言豊臣秀長が郡山城に入城する1585年、順慶の死からわずか1年後のことです。松永弾正の侵略には、不屈の決意で戦い抜いた大和武士の信念も、元から土地など持っていない、遥か下層から成り上がった支配者に通じることは、なかったのです。